

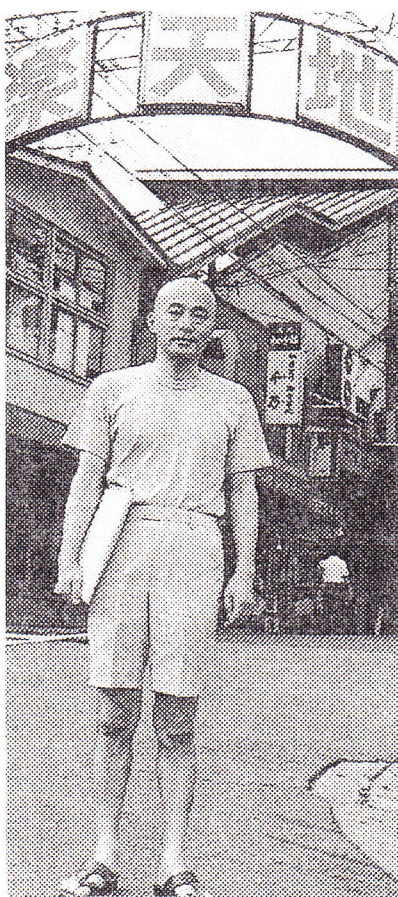
1993年(平成5年)8月15日

日曜日

年収150万円

で暮らす法

吉田清彦さんに聞く



ふだん着姿の吉田さん。バックの「楽天地」は最寄りの阪急「王子公園」駅沿いの飲食街(神戸市灘区)

三月から毎日曜日に連載してきた「年収150万円で暮らす法」が、今月八日の第二十一回「お金の貯め方教えます」で終わった。筆者の吉田清彦さん(四八)はシングル。果敢にプライバシーを公開しながら書き進んだ実践的清貧の暮らし方ガイドは、多方面で反響を呼んだ。五月にはラジオ大阪のヤング向け番組にも登板、この秋には京都で講演が予定されている。さまでまな年齢層で人気を博した『平成の気取らぬ清貧流』家元・吉田さんの語らざるホンネに迫ってみた。

(河部 光男記者)

吉田さんが、自分のライフスタイル「清貧流スリムな暮らし方」を、他人に向かって提唱しはじめたのは「バブル崩壊」の七、八年前。

きっかけは「今の世の中、多くの人が、お金を使うことイコール豊かさ、と錯覚しているでしょ。虚栄で無理してお金を使って、その使ったお金を稼ぐために働い

目的さえはつきりすれば、実行は簡単です。三十歳で家が持てます!のコマーシャルといっしょで、漫然とした消費が減って目的以外のお金は使わなくなるから、それだけスリムな生活に近づくわけね」

しかし結婚経験がある家元としては、世帯持ちで清貧を実践することの難しさは重々承知だ。

「家族がいると互いの立場や親戚(せき)関係のしがらみなどで、知らず知らずのうちにエエカッコしてしまうから。世間の方も一応結婚しているとそれなりの社会的役割を期待するし、地域のお付き合いから下りにくい。その点、独り者は親戚も世間も『独り身だからしょうない』と身勝手を許してくれるところがあるから楽よ」。

この言葉、結婚中につれあいのアドバイスで随分と

「家元は言う。『いや、

「清貧」実行は簡単です

自分を大切にする生き方を

ず、一体何がおもしろくて、清貧流を実行するのか。

「それはやっぱり、人生楽しく生きたいからよ」

お金は、この楽しく自分重視の（世間的には身勝手といわれても）人生を送るためにこそ必要なのであって、お金のためにしたいことができないのは困るとい

うわけ。家元がしたいことは、さまざまな市民グループに入って自分の書きたいことを書き、言いたいことを書き、読みたい本を読み、できれば自身の本も出版して生きていくこと。

条件やはりシングル？

「少し前にアメリカでミーズム（自分中心主義）が若者の間に広がって、マスコミがミーズムは社会性を否定するものだとして批判したけれど、僕は、ミーズムこそ人類が初めて

手にした実質的な個人重視だ。価値観だと思っわけね。世間ではいろいろとパラダイム変換とか言っているけれど、実態は違っていて、

重が高くて、個人はそこに貢献することで初めて価値を与えられてきたけど、今は個人がそれぞれの充実を主張したんだから、人類は確実に進歩？しているんじゃないかな」

「ミーズムの蔓（まん）延は人類史上の初体験だから、細川新首相ではないが、多少グクシヤクするのはやむを得ない、と家元は冷静

労働に換算して百二十日分を注ぎ込む。もう立派なミーズムの大先輩である。その家元の「楽しいことをしよう」ライフの工夫の果てに誕生したのが、さきの「年収150万円で暮らす法」であった。

七月、家元の実収入に結び付いた労働は一日だけだったという。がむしろに働いた十年があつて、今はその貯金と信用の蓄積で食べているようなもの。蓄積の底が見えて来たしたのでそのうち働かなきゃならぬかな」と多少焦りの気分をにじませながら、家元はカンラカンラと笑った。

洋服を買い、貯金を一度すっからかんにした自身の体験がにじんでいる。世間付き合いから下りて、シングル生活、お金も使わず社会的榮譽も追わ

「会社人間が多いと随分マスコミでもいわれているけど、ミーズムの大先輩である。その家元の「楽しいことをしよう」ライフの工夫の果てに誕生したのが、さきの「年収150万円で暮らす法」であった。

七月、家元の実収入に結び付いた労働は一日だけだったという。がむしろに働いた十年があつて、今はその貯金と信用の蓄積で食べているようなもの。蓄積の底が見えて来たしたのでそのうち働かなきゃならぬかな」と多少焦りの気分をにじませながら、家元はカンラカンラと笑った。

七月、家元の実収入に結び付いた労働は一日だけだったという。がむしろに働いた十年があつて、今はその貯金と信用の蓄積で食べているようなもの。蓄積の底が見えて来たしたのでそのうち働かなきゃならぬかな」と多少焦りの気分をにじませながら、家元はカンラカンラと笑った。

七月、家元の実収入に結び付いた労働は一日だけだったという。がむしろに働いた十年があつて、今はその貯金と信用の蓄積で食べているようなもの。蓄積の底が見えて来たしたのでそのうち働かなきゃならぬかな」と多少焦りの気分をにじませながら、家元はカンラカンラと笑った。